

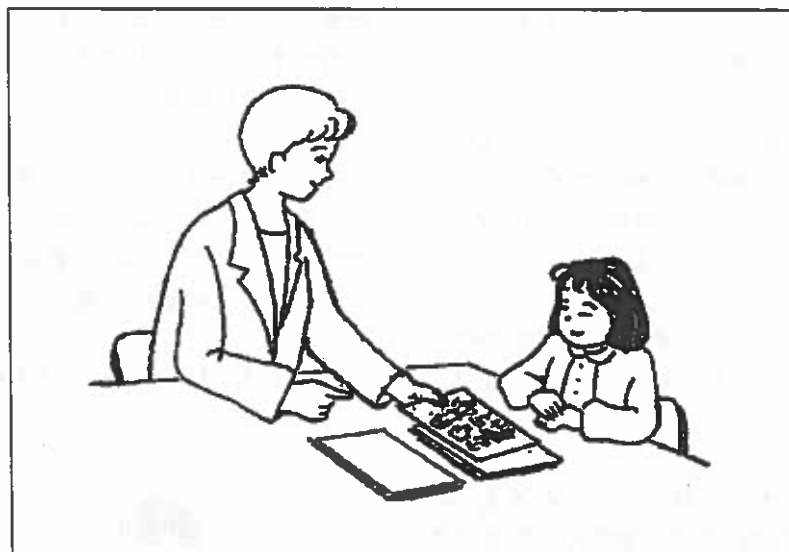
## 第4章 テストの実施に当たって

テストは下図に示すように、机の角をはさんで90度の角度になるように配置する。絵カードはテストと子どもと一緒に見られる位置に置く。テストは言葉遣いに細心の注意が必要である。しゃべり過ぎは禁物、テストのことばは最小限に止めて、子どもの発話を引き出すことに徹しなければならない。テストはビデオに収めるのが理

想的であるが、無理な場合はMD（ミニディスク）、テープレコーダーで録音する。

第4章では、テストを実施するに当たり、必要な準備、テスト中の注意事項などについて述べる。いずれもフィールドテストを通して得た貴重な知見である。

図 11 テスターと子どもの位置



### 1. 用意するもの

テストに当たって用意するのは、OBCテストと録音機器である。テストは、次の3点である。

- OBCフローチャート  
対象に合わせて調整したもの

- 絵カード  
フローチャートに合わせて選んだもの
- 語彙カード  
ウォーミングアップに必要なもの

録音機器はMD、テープレコーダー、ビデオカメラである。テストの目的によって使い分けると

よい。例えば、教師が生徒記録、成績表作成などに活用する場合は、鮮明に録音でき再生操作の早いMDが理想的である。また保護者の啓蒙に活用したり、生徒の発達をポートフォリオ的に継続記録していきたい場合は、ビデオカメラが良い。また研究の資料として活用する場合は、MDとビデオカメラの両者を使用するのが理想的である。

もちろんMDやビデオカメラが入手不可能な場合は、テープレコーダーに録音する。

録音機器の取り扱いが簡単なようであり、かなり失敗例も多かった。自明のことではあるが、次の点に極力注意する必要がある。

- 被験者によっては声が小さかったり、うつむいて話したりするので、機器に内蔵されているマイクでは声をとらえにくい。できれば、外付けマイクを被験者の胸に取り付けるとよい。
- 外付けマイクの電池が切れていて録音できないということがよく起こるので、使用前に必ず確認すること。
- ビデオカメラは十分な採光が得られるよう考慮し、被験者の顔の表情や身振り・手振りなどが良く観察できる位置に設置する。
- 電池、ディスク、テープなど必要なものは予備を十分に準備し、被験者が替わる度に開始前に残りを確認し、多少無理かと判断された場合は、新しいものを補給した方がよい。テスト中の補給はテストの流れを中断し、結果に影響する可能性がある。また、録音再生の場合にも二つにまたがると不便なのでぜひ避けたい。

## 2. カードの使い方

単語カードも絵カードも、テスターが子どもといっしょに見られる位置に置く。テスターがカードをめくるとき、子どもの目の前に新しいカードが来るように置くとよい。

使用するカードは、使用順に並べて、伏せておく。その場合、最初のカードを一番上に最後のカードを一番下にして積み上げておく。伏せ方を間違えると、いきなり最後の認知カードが出たり、絵が逆さになっていたりするので、前もってめくり方、置き方を工夫しておくとうい。順々にきちんと前のカードを重ねておけば、そのままそっくり裏返せば即、次に使える。

また絵カードをめくるときは、「つぎは何が出てくるのだろう」という期待をもたせながら、もたつかず、スムーズに被験者の目の前に置かれるようにめくることが必要である。

図12 カードのめくり方



### 3. テスト中に生ずる問題への対処

実際にテストを始めてみると、予期しなかった問題や、どう対処していいかわからない問題に遭遇する。つぎの例は、これまで遭遇したいろいろな問題を整理し、その対処のし方、約束ごとを示したものである。

- 被験者がテストしていることば以外のことばを使用し始めた場合は、「〇〇語で話してください。」といて、2度まで注意する。
- 被験者がテストのことばを理解できない場合は、3回まで繰り返す。この場合も、話すスピードを変えたり、ことばを置き換えたりしないこと。
- 被験者のことばが聞き取れなかった場合、テストは、「え?」、または「ごめんなさい。もう一度言ってください。」と言って被験者にもう一度くりかえしてもらおう。
- 被験者のことばに誤りがあった場合、テストは訂正したり、説明を加えたり、正しい答えを教えたりしないこと。ただし、被験者がわからないことばをテストに尋ねた場合は、そのことばを与えてもよい。

### 4. テスターの態度と言葉遣い

テストは、被験者を緊張させるようなことを極力避け、常に気持ち良くテストを進行させるようにすること。低学年で被験者数の多い場合や、2言語を同時に実施する場合は、テスト以外に会場への送り迎えや順番待ちに簡単な会話をかわしたりして、被験者の緊張をほぐしたり、テストの進捗状況をモニターしたりすることのできるアシスタントがいるとよい。あくまでも「被験者は

子どもである」ということを常に念頭におく必要がある。

テストの態度として、特に次の点に留意するとよい。

- テストは、被験者を部屋に迎えたときから始まるのであり、客を迎えるときのように、にこやかに、まず、「こんにちは」と挨拶を交わしながら席に案内し、椅子の位置を調節し、伏せたカードの位置を調整してテストを始める。
- テスターは終始よい聞き手になり、うなずいたり、相槌を打ったりして、被験者の話しに関心を持っているということを態度で示すこと。
- 被験者からの即答を期待せず、じっくり余裕をもって待つこと。
- レベルに合わない発問やタスクを課すと、体をゆする、目が遊ぶ、椅子をのけぞらせて揺らす、手遊びをする、指を口に入れるなどさまざまな兆候が現れる。このような、被験者が発信する暗黙のメッセージを見逃さないようにし、追いつめないようにする。
- 被験者の緊張を高めるので、面前での採点はしないこと。

テストの言葉遣いでは、次の点に極力留意する必要がある。

- テスターは、背景調査の結果から被験者の年齢、会話力のレベルなどを把握し、それに応じて自分自身の使う語彙、文型、話体などを十分にコントロールすること。

- 馬鹿丁寧な敬語を使ったり、難解な語彙を使ったりしないこと。
- 過度に褒めたり被験者の会話力を「テストする」、「試験する」、「試す」というようなことばを使ったりして必要以上に被験者の緊張を高めるような言動は慎むこと。
- テストは被験者の会話力のレベルに合わせて会話を進めるが、母語話者としての自然な会話のスピードを落としてはいけない。
- 被験者の発話を引き出すことが目的であるから、テストのことばは最小限度に止めること。話しすぎて答えを与えたり、ヒントを与えるような指示の仕方は極力避ける。
- 導入の部分（自然対話）は「です・ます体」を使用することになっているが、年齢の低いJFLの子どもの場合などは家庭言語が「だ体」中心なので、ともすると改まった質問に緊張したり、とまどったりすることがある。そのような場合は必要に応じて「だ体」に切り替えることが大切である。また逆にJFLの子どもの場合は、教室の中で教師が使用する「です・ます体」しか理解できない場合もあり、「だ体」で質問されると緊張したり、とまどったりすることがあるので、一貫して「です・ます体」を使うこと。

## 5. 2つの言語のテストをどう実施するか

2言語を同時にテストする場合の順番決定は、自信を持たせるために被験者の強いことばのテストを先行させるのが理想的である。しかし、被験者の言語能力が把握できないときもある。大勢の場合はなかなか理想通りには行かないので、次のような配慮をするとよい。

- 被験者のことばの能力を把握している場合は、弱い方のことばの発達が不十分な被験者から順に強いことばのテストを優先させるようなグループ分けを考慮する。
- 被験者のことばの能力を把握していない場合は、グループをL1（強いことば）先行グループとL2（弱いことば）先行グループに2等分する。
- 6—7歳児や虚弱体質児などの場合は2言語を同日にテストするのは体力的に無理があるので極力避ける。

## 6. 保護者、被験者との連絡

テストが初回である場合や被験者の年齢が低い場合などは、テストに先がけ、保護者にテストについての説明をし、納得、了解を得て置くことが理解や協力を得る上で望ましい。

また、被験者のテストに対する不安を除き、好結果を得るためにも、事前に十分な説明をして承諾を得る必要がある。年齢が低い場合には、テストや教師よりも、むしろ保護者を通し、本人の理解度に合わせて説明してもらう方がよい。説明に当たっては「テスト」ということばをなるべく避け、「〇〇語のインタビューだから、〇〇語で思った通りのことをたくさん話せばよいので、何も心配することはない」ということを強調する。

子どもの会話力は、学習環境、家庭環境、性格などによって非常に異なるものなので、アンケート形式で、年齢、学年、性別、対象言語の学習歴、家族関係、家庭言語、性格等々、できるだけ詳しい情報を把握しておくといよい。テストに先立って背景を詳しく把握することにより、実施に当たり

期待できる会話力の予測を立て、無理なタスクを与えることを防ぎ、被験者に余計な不安感や不快感を与えることが避けられる。例えば、年齢の低い被験者（8歳以前）の場合、母親と死別している子どもに母親との対話場面をもってきたり、母子家庭の子どもに、父親にものをねだる場面をもってきたりするものは、ぜひ避けたいものである。参考までに、カナダの継承日本語用（JHL）に開発した言語背景調べの一例を次のページに掲げた。

このような言語背景調べが不可能な場合は、導入会話で、年齢を考慮しながら、極力自然な形で被験者自身から必要な情報を引き出すとよい。

被験者の言語背景は保護者から得るのが理想であるが、担任教師に生徒の家族関係、会話力一般などについてあらかじめ聞いておくことも参考になる。



## 2 言語環境調べ

### —カナダの継承日本語教育(JHL)を例として—

OBC会話テストの結果を活かすための資料として必要ですので、できるだけ詳しくお答えください。

なお、ご質問がありましたら、\_\_\_\_\_までお問い合わせください。

お子さんの名前：\_\_\_\_\_ 男( )女( ) 生年月日\_\_\_\_\_

記入者：父\_\_\_\_\_ 母\_\_\_\_\_ その他\_\_\_\_\_

#### A. お子さんについてお答えください。

1. 出生地： 日本( ) カナダ( ) その他\_\_\_\_\_  
カナダに来る前に住んでいた所：\_\_\_\_\_

2. 現地の学校の名前：\_\_\_\_\_ 学年：\_\_\_\_\_年  
学校の種類：公立校( ) 私立校( ) セバレートスクール( )  
その他\_\_\_\_\_  
フレンチイマージョンですか。 はい( ) いいえ( )  
イマージョンの種類：幼稚園から( ) 4年生から( ) G7から( )  
その他\_\_\_\_\_

3. プレスクール(ナースリー、幼稚園を含む)に通園しましたか。はい( ) いいえ( )  
「はい」の場合：公立( ) 私立( ) 日本語( ) 英語( ) 通園年数：( )年  
デイ・ケアの体験はありますか。はい( ) いいえ( )  
「はい」の場合：公立( ) 私立( ) 日本語( ) 英語( ) 通園年数：( )年

4. 家族構成(同居者を含む)：父親( ) 母親( ) 兄( ) \_\_\_名 姉( ) \_\_\_名  
弟( ) \_\_\_名 妹( ) \_\_\_名 その他\_\_\_\_\_

5. 家庭内では主に英語で話しますか、日本語で話しますか。その他、話すことばを( )に記入してください。  
両親間： 主に日本語( ) 主に英語( ) 両方( ) その他( )  
父親と本人： 主に日本語( ) 主に英語( ) 両方( ) その他( )  
母親と本人： 主に日本語( ) 主に英語( ) 両方( ) その他( )  
兄姉と本人： 主に日本語( ) 主に英語( ) 両方( ) その他( )  
弟妹と本人： 主に日本語( ) 主に英語( ) 両方( ) その他( )  
同居者と本人： 主に日本語( ) 主に英語( ) 両方( ) その他( )

6. 日本語学校以外でお子さんが日本語で交流できる親戚や友人がありますか。 ある( ) ない( )  
「ある」の場合は、次の欄にご記入ください。(カナダ国内外を問いません。書ききれないときは、裏面をご利用ください。)

本人との関係	年長	年少	同年	良く交流	時々交流	泊り合う	電話で交流	来加滞在時	その他

7. 本校在籍年数：（ ）年  
 本校以外の日本語学習機関：学校名 \_\_\_\_\_ 在籍年数：（ ）年

8. 日本語学校以外で、日本語、日本文化に触れる習い事をしていますか。 している（ ） していない（ ）  
 「している」の場合は、詳しくお書きください。例：柔道、日本舞踊

9. 訪日したことがありますか。 ある（ ） ない（ ）  
 「ある」場合は、次の表にご記入ください。（学校体験その他の欄は、団体名などを記入してください。）

訪問時の年齢	滞在期間	学校体験、その他	体験期間

\*書き切れない場合は、裏面を利用してください。

10. 保護者から見たお子さんの性格（該当するものが複数になっても結構です）

- a) 明るく、おだやか（ ）
- b) 人と話すのが好き（ ）
- c) 活発で、思っていることをはっきり言う（ ）
- d) 一人で何かをしているのが好き（ ）
- e) なかなか人と話そうとしない（ ）
- f) 日本のことに強い興味をもち、積極的に日本語を話す（ ）
- g) 日本のことに強い興味はあるが、話すのは苦手（ ）
- h) 日本のことに強い興味はあるが、日本語の勉強は苦手（ ）
- i) 日本語に対して、あまり興味がない（ ）
- j) 日英を問わず読書が好き（ ）
- k) その他 \_\_\_\_\_

B. 保護者御自身についてお答えください。

1. 出生地：父親 \_\_\_\_\_ 母親 \_\_\_\_\_  
 （カナダ生まれの場合は、その背景を、…系と書き添えてください。）

2. カナダ移住/入国年度(カナダ生まれの場合不要)：父親 \_\_\_\_\_ 年 母親 \_\_\_\_\_ 年

3. カナダに来た目的：移住（ ） 駐在（ ） その他 \_\_\_\_\_

4. 職業：父親 a) 会社勤務 日系企業（ ） 現地企業（ ） その他 \_\_\_\_\_

- b) 自営業 ( ) \_\_\_\_\_  
 c) その他 \_\_\_\_\_
- 母親 a) 会社勤務 日系企業 ( ) 現地企業 ( )  
 b) 自営業 ( ) \_\_\_\_\_  
 c) その他 \_\_\_\_\_

5. 日系の教会やコミュニティー活動に参加していますか。 はい ( ) いいえ ( )  
 「はい」の場合は、次にご記入ください。

参加活動団体名	主に参加する人	良く参加	時々参加

6. お子さんの英語力に比べ、日本語がどの位まで出来るようになってほしいとお思いですか。
- a) 会話する力 ( ) 英語はともかく、日本語は親のいうことが分かるぐらいにできれば良い。  
 ( ) 英語はともかく、日本語は日本人との会話がある程度できればよい。  
 ( ) 英語と同じように、日本語でも日本人との会話に不自由しないぐらいになってほしい。
- b) 読む力 ( ) 英語はともかく、日本語は平仮名、カタカナや漢字がある程度読めれば良い。  
 ( ) 英語はともかく、日本語は簡単な手紙や漫画、雑誌などが読めれば良い。  
 ( ) 英語と同じように、日本語でも新聞や専門書が自由によめるようになってほしい。
- c) 書く力 ( ) 英語はともかく、日本語は平仮名、カタカナや漢字がある程度書ければ良い。  
 ( ) 英語はともかく、日本語は簡単な手紙が書ければ良い。  
 ( ) 英語と同じように、日本語でも文が自由に書けるようになってほしい。
- d) その他(具体的に)

7. お子さんとの交流について (両方の場合は、父母ともにチェックしてください。)
- a) 日本語学校の宿題の面倒を見るのは： 父親( ) 母親( ) その他 \_\_\_\_\_  
 b) お子さんとの日本語での交流： 意識的に努力している( ) 成り行きにまかせている( )  
 c) その他 \_\_\_\_\_

8. 日本語話者である来訪者はありますか。 ある ( ) ない ( )  
 「ある」の場合、次にお答えください。(両方の場合は、父母ともにチェックしてください)
- a) どの位の頻度ですか。 よくある( ) たまにしかない( ) その他 \_\_\_\_\_  
 b) どちらの来訪者が多いですか。 父親( ) 母親( ) その他 \_\_\_\_\_

上記の質問事項や、またお子さんの言葉について何かコメントがあったらお書きください。

ありがとうございました。



## 第5章 絵カード

短時間になるべく自然な形で子どもの三面の会話力を知ろうとすると、どうしても絵カードが必要である。第5章ではこれまでカナダ日本語教育振興会の会員の手によって、改良を重ねてきた絵カードを紹介し、その使い方について述べる。<sup>1)</sup>

絵カードはその使い方が生命である。使い方によって、その有用度が大きく変わってくる。特に会話テストでは、テストの説明を最小限にして子どもの発話能力を最大限に引き出す必要がある。テストが必要以上のことばを与えてしまうと、話す力を調べるテストにならなくなってしまふからである。また子どもの場合は成人と違って、絵カードに文字で状況の説明を加えたり、タスクを明示したりすることができない。子どもの読む力も発達途上にあり、文字説明を加えると会話テストならず、読解テストになってしまう危険があるからである。このため、テストの絵カードの提示の仕方、使い方に工夫が必要である。本章では、絵カードを使う時に、テストがどのような説明を加え、どのような問いかけをし、どのようなタスクを与えるかということについて、これまでのフィールドテストの経験に基づいて、詳しく説明する。

一方、絵というものがいろいろな誤解を招くことも否めない事実である。文化的背景が違えば、絵から子どもが読みとる意味も解釈も変わってくる。絵カードの作成に当たっては、言語文化の異なる母語話者に意見を求めて、改良を重ねてきたが、それでも対象児によってはここに提示した絵カードでは不適當、どうしても自作絵カードを作成しなければならない状況も当然考えられる。そういう場合には、本章(50ページ)の「自作絵カードの作り方」を参考にしていきたい。

絵カードは実際に使える形にして章末にまとめ

た。使用される際には、語彙カードの場合は約7.5cm X 10 cmの台紙に貼り、一枚ずつめくりながら使うとよい。その他のカードは、基礎カードは赤、対話カードは緑、認知カードは黄色などのように、色分けした台紙に張り付けて使うと便利である。また、より子どもに親しみやすい絵カードにするために、絵に色をつけるのも一案であろう。

### 1. 絵カードの種類と目的

55ページの絵カード一覧表に示したように、OBC絵カードは全部で72枚、つぎの5種類からなり、それぞれの使用目的はつぎのようである。

【語彙カード】	40枚
【基礎カード】	7枚
【対話カード】	5枚
【認知カード】	4枚
【代用カード】	16枚

#### 1.1 【語彙カード】

語彙カードには2つの目的がある。一つはレベルチェックで、もう一つはウォーミング・アップである。つまり、語彙を調べて子どもの大体の力のレベルを知ることと同時に、子どもに安心感を与えることである。第2の子どもの緊張感をほぐすという目的のために、なるべく子どもが普段から馴染み親しんでいる語彙を入れておく必要がある。

家庭で使用していることばの場合は、かなり語彙が豊富であるが、教室のみで学習している言語の場合は、カリキュラムと密着した語彙、すでに学習した語彙を中心にした方がよい。40の語彙はJHL(継承語教育)低学年の学級で教師が意図的に導入する語彙を基盤にして選んだものである。

<sup>2)</sup> 名詞が33語、動詞が4語、形容詞が3語含

まれている。しかし、それぞれの土地に適し、子どもにとって親しみ度の高い語彙にするため、状況によっては一部の語彙カードを入れ替える必要がある。

絵カードを使用すると、テスターが予期しない答が出てくるのが普通である。はっきり間違いである場合は処理しやすいが、予期していた答えとは違うが間違いとは言い難いという類の答えは処理しにくい。つきにかっこ内に示した例は、これまでのフィールドテストで許容範囲と解釈され、正解と認められた例である。これ以外の正解も考えられるので、語彙カードを使用するときには、それぞれの置かれた学習環境で許容範囲を決める必要がある。

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| 1 口            | 21 木             |
| 2 手 (右手)       | 22 葉 (はっぱ)       |
| 3 ゆび (人差ゆび)    | 23 月 (お月さま、月と星)  |
| 4 足 (右足)       | 24 花 (ゆり)        |
| 5 ねずみ          | 25 本             |
| 6 うさぎ          | 26 えんぴつ          |
| 7 魚 (こい、たい、金魚) | 27 ぼうし           |
| 8 牛            | 28 くつした (ソックス)   |
| 9 とり (すずめ)     | 29 かさ            |
| 10 へび          | 30 きて            |
| 11 ぶどう         | 31 ふね            |
| 12 いちご         | 32 ひこうき (紙飛行機)   |
| 13 バナナ         | 33 バス (車)        |
| 14 たまご (ゆで玉子)  | 34 泣いている (泣く)    |
| 15 うち (いえ)     | 35 はいている (ぬぐ、はく) |
| 16 つくえ         | 36 のんでいる (飲む)    |
| 17 いす          | 37 よんでいる (読む)    |
| 18 電話          | 38 あつい           |
| 19 はさみ         | 39 ながい           |
| 20 山           | 40 うれしい          |

## 1.2 【基礎カード】

次の7枚の基礎カードは、絵で場面を設定し、テスターの質問を聞いてどのくらい理解し、どのように質問に答えるかを見るためのものである。基本文型の理解度と使用可能度を見る。小学校低学年や初歩の学習者の場合は、テスターが使用できる単語や文型が非常に限られるため、テスターの言葉遣いには細心の注意が必要である。

これまでのフィールドテストでは、7つの絵カードを使用してきたが、この中から対象児の年齢や学習環境を踏まえて、無理のない場面を選択するとよい。また【代用カード】の中にも6枚の基礎カードが含まれている。

つぎに7つの絵カードの番号と名前、そしてその説明が載っているページと実物大の絵のページを示す。

	説明ページ	実物大ページ
1「部屋」	41	61
2「スポーツ」	41	61
3「教室」	42	62
4「日課」	42	62
5「職業」	42	63
6「許可」	43	63
7「季節」	43	64

### 1.3 【対話カード】

対話カードは、絵で場面設定をして、どのぐらい自分から必要な発話をし、必要な情報を得たり、与えたりして、課せられたタスクをこなすことができるかを見るための絵カードである。これまでのフィールドテストで使用して来たものは次の5枚であるが、その他【代用カード】の中に5枚の対話カードが含まれている。

	説明ページ	実物大ページ
8「頼む」	44	64
9「誘う」	44	65
10「問い合わせ」	44	65
11「ねだる」	45	66
12「伝言」	45	66

### 1.4 【認知カード】

認知カードは、内容に見合った語彙・構文を駆使して、どのぐらい内容のある、まとまった話しができるかを見るためのものである。教科学習に使われていることばのテストの場合は、年齢相応の話題を1つ選んで、自然現象や社会生活のルールについて説明するというタスクが望ましい。し

かし、教科学習と関係なく日本語を学習している子どもたちの場合は、どのぐらい自分一人でまとめて話せるかを見るための認知カードが必要である。

認知面の会話力は年齢的制約があり、小学校高学年にならないと高度の認知面の会話力は期待できない。ただ、13の「お話し」カードなどは、年齢を越えて使用可能なカードの一つである。これまでのフィールドテストでは、小学校1年から4年生位までかなりいい反応が得られた。

次の4つの認知カードはフィールドテストで使用してきたものである。この他【代用カード】の中に5枚の認知カードが含まれている。

	説明ページ	実物大ページ
13「お話し」	46	67
14「公害」	46	67
15「地震」	46	68
16「食物摂取」	47	68

### 1.5 【代用カード】

代用カードはつぎのような4つの目的のために使うカードである。

第1は、子どもの年令差、男女差、文化差などによって、主な絵カードが適当ではないと判断された場合に使用する。またOBCを定期的に使用して会話力の伸びを見るときなどもレベルを大体同じにして、目先きだけが変わった絵カードが必要になる。そのためにも使用できるものである。例えば、次の5枚の絵カードはその例である。

	説明ページ	実物大ページ
17 「許可 2」	47	69
20 「スポーツ 2」	47	70
21 「誘う 2」	47	71
22 「ねだる 2」	48	71
23 「情報を得る」	48	72

第2は、初歩の学習者の会話テストで、定型表現や文型・機能の習得度との関係でOBCを使用する場合に役立つ代用カードである。基礎カード、対話カードとして使用することが出来る。例えば、次の6枚がその例である。

	説明ページ	実物大ページ
18 「やりもらい」	47	69
19 「授業に遅れる」	47	70
24 「助けを求める」	48	72
25 「廊下で教師に会う」	48	73
26 「教師に電話する」	49	73
27 「新生入生にインタビュー」	49	74

第3は、多目的に使えるカードである。タスクの与え方やテストの問いかけを変えることによって、同じカードが基礎カードとしても使えるし、また対話カード、認知カードにもなるものである。例えば、次の5枚がその例である。

	説明ページ	実物大ページ
5 「職業」	42	63
18 「やりもらい」	47	69
23 「情報を得る」	48	72
24 「助けを求める」	48	72
29 「あやまる」	49	75

第4は、認知カードの代用として使えるものである。また認知面の会話力は学習環境によって大きな差が見られる。学習言語、学校言語として使

われていない言語の場合は、「リサイクル」、「公害」ぐらいが上限と考えられるが、学習言語、学校言語として使われている言語の場合は、教科と密着した年齢相応のトピックが望ましい。その場合は、新たに絵カードを作成するか、絵カードなしで発話を引き出す工夫が必要であろう。例えば、次の4枚がその例である。

	説明ページ	実物大ページ
28 「自己紹介」	49	74
30 「リサイクル」	46	75
31 「自転車に乗る時の注意」	50	76
32 「蝶の一生」	50	76

## 2. 語彙カードの使い方

まず初めに答え方が子どもに分かるように、例を示すことが大事である。例えば、次のように切り出すことができる。

まずテストは第1番目のカード(口)を示して、「これは何ですか」と言う。子どもが「口」と答えたら、「そう(です)ね。口(です)ね」と言う。そして、カードをめくり、2番目のカードを示しながら「では、2は?」と言う。それ以降は、テストはカードをめくりながら番号を言うだけにする。もし無言で答えがなかったり、子どもが間違えた答えをした場合は、答えを与えたり、間違いを矯正したりせずに、さりげなく流して次ぎのカードを示す。

答えの引き出し方は、品詞によって変えなければならない。名詞の場合は「これは何ですか」でもいいが、動詞の場合は「今何をしていますか」、形容詞の場合は「どんな〇〇ですか」と聞くとよい。詳しくはつぎのようである。

## ◆「これは何ですか」

名詞の場合（語彙カード1-33）は「これは何ですか」と聞く。答えが「果物」とか「動物」とかいう範疇語で返って来た場合は、さらに詳しく「どんな果物ですか」とか「どんな動物ですか」と聞く。逆に、「魚」を「こい（鯉）」「たい（鯛）」、「鳥」を「すずめ」などと答えた場合は、そのまま正解として認める。

## ◆「何をしていますか」

動詞の場合（語彙カード34-37）は「何をしていますか」と聞く。答えが返ってこない場合は、反対のことばを与えて聞き出す。例えば、34の場合、「笑っていますか」、また35の場合、「くつをぬいでいますか」などである。

## ◆「どんな〇〇ですか」

形容詞の場合（語彙カード38-40）の場合は、「どんな〇〇ですか」と聞く。それで答えが返って来ない場合は、反対の形容詞を与えて答えを引き出す。例えば、38の場合、「スープは冷たいですか」、39の場合、「髪（の毛）は短いですか」という具合である。

### 3. 基礎カード・対話カード・認知カードの使い方

日本語OBCテストを想定して基礎カード、対話カード、認知カードの使い方、テストの問かけ方、使用上の注意をカード番号順に具体的に述べると次のようである。他の言語で絵カードを使用する場合は、それなりの調整が必要である。特に文型の運用能力を調べる基礎タスクでは、母語話者のインプットとチェックが不可欠である。<sup>3)</sup>

## 1 「部屋」

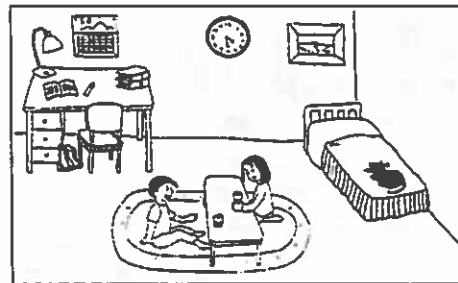
場所に関する文型や語彙の定着度を見るための基礎カード。例えば、「あります／います」（動詞）、「に」（助詞）、「上、下、右、左」その他（場所を表わす語彙）。まず次のような質問をする。

- ◆「この部屋に何がありますか」
- ◆「〇〇はどこにありますか」

その後で、次のような「いる、ある」の使い分けに関する質問をする。

## ◆「ねこがいますか」

これらの問いかけに対して、困惑の表情を見せた場合は、「これは何ですか」のような単語レベルで答えられる質問に切り替える。



## 2 「スポーツ」

スポーツを話題にして、次のような習慣的動作、好き嫌い、可能に関する文型の定着度を見る基礎カード。

- ◆「〇〇をしますか」
- ◆「〇〇が好きですか」
- ◆「〇〇が出来ますか」

子どもがまだスポーツの直接体験がない年少児（5-7歳）の場合は、父親や年上の兄弟姉妹のスポーツの話にして、つぎのような質問をする

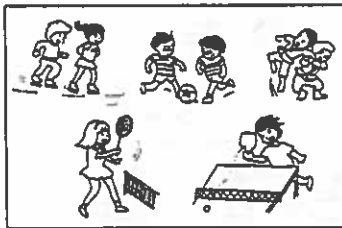
とよい。

- ◆ 「お母さんはテニスが出来ますか」
- ◆ 「お兄さんはサッカーが好きですか」

またこれらの問いかけに対して、困惑の表情を見せた場合は、単語のレベルで応答できる質問に切り替える。

また「スポーツ」は人気のあるものとそうでないものが国によって異なるので、必要に応じてスポーツの種類を入れ替える必要がある。代用カード20の「スポーツ2」はそのために用意したものである。

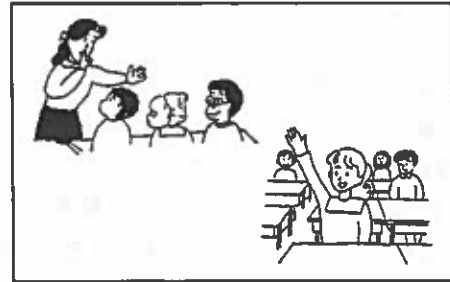
次に1「スポーツ」と20「スポーツ2」を対比して示す。



### 3 「教室」

毎日の学校生活で遭遇する場面に関する文型、語彙の定着度を見る基礎カードで、つぎのような質問をする。

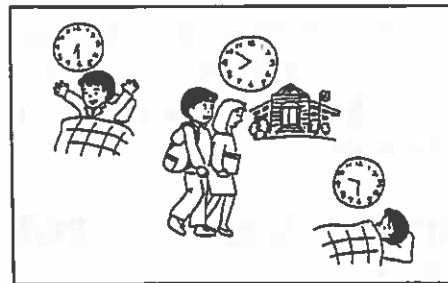
- ◆ 「生徒ですか、先生ですか」
- ◆ 「先生は何と言っていますか」



### 4 「日課」

動詞の過去形、て形を使って習慣的動作や過去の出来事に関する文型の定着度を調べる基礎カード。例えば、つぎのような質問をする。

- ◆ 「いつも何時に起きますか」
- ◆ 「朝起きて、何をしますか」
- ◆ 「毎日何時ごろ寝ますか」
- ◆ 「家に帰ってから、何をしますか」
- ◆ 「今朝何時に起きましたか」
- ◆ 「朝起きて、何をしましたか」
- ◆ 「昨日何時ごろ寝ましたか」
- ◆ 「昨日家に帰ってから、何をしましたか」

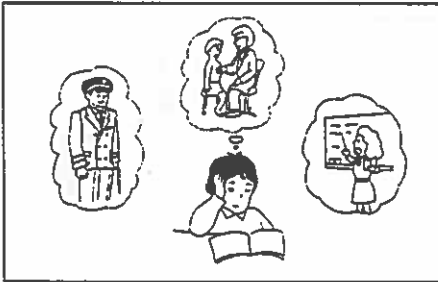


### 5 「職業」

「～たい」（希求表現）や「～たら」を使って将来の夢について語る基礎カード。例えば、つぎのような質問をする。

- ◆ 「何になりたいですか」
- ◆ 「大きくなったら、何になりたいですか」

お医者さん、先生、パイロットなどの職業の名前が出ない場合は、「お医者さんは（どうですか？）」というような誘導質問をしてみる。それでも答えが出ない場合は、なりたいものの絵を指で差すよう指示してもよい。



この「職業」カードは認知カードとしても使用できるが、その場合は、つぎのような質問を加える。

- ◆ 「どうして〇〇になりたいですか」

## 6 「許可」

許可を求める表現を引き出すための基礎カードである。例えば、テスターが子どもの名前を使って、次のように質問する。

- ◆ 「〇〇さんはトイレに行きたいです。  
先生に何と言いますか」

この場合絵カードの生徒を指で差し、生徒の言うことばであることを強調する必要がある。そうしないと、生徒が聞き慣れている教師のことば、例えば、「はい、いいです」と答える子どもが多い。年長児の場合は、行き先をトイレではなく、ロッカーにした17「許可2」カードを使用するとよい。子どもにロッカーが馴染みのないものである場合は、その他のものに代えて使うとよい。



## 7 「季節」

つぎのような質問をし、季節に関するトピックを中心に、形容詞、形容動詞に関する理解や、使い方を見る基礎カードである。

- ◆ 「今夏ですか」
- ◆ 「(今日は) 暑いですか」
- ◆ 「夏と冬とどっちが好きですか」

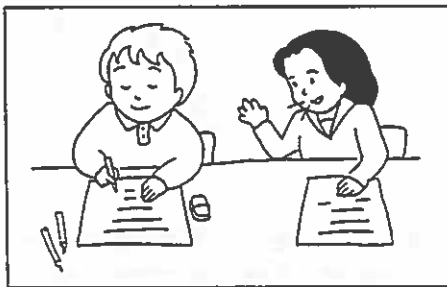


年長児の場合や、かなり語彙、文型の豊富な子どもの場合は、つぎのような質問をすることもできる。

- ◆ 「〇〇（地域）では、冬寒いですか」
- ◆ 「どの季節が一番好きですか」

### 8 「たのむ」

教室で書こうと思ったら、鉛筆がない。隣の子どもに鉛筆を貸してくれと頼むタスクのための対話カードである。友達間の会話なので、「鉛筆貸して」という表現が出ればよい。代用カード25「廊下で教師に会う」も頼む、頼まれるという状況で、特に年長児に使えるカードである。

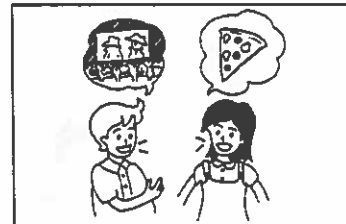
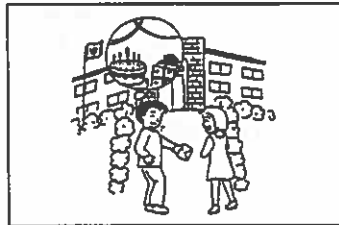


### 9 「誘う」

親しい友達を「誘う」というタスクができるかどうかを見る対話カード。親しい友達との会話であるため、「です・ます体」ではなく、「だ体」(常体)の会話であることが期待される。お誕生日のパーティで、集まる場所や時間、一緒にすることなどの取り決めなどのやりとりができるかどうかを見る。この場合、テスターは導入会話で聞いておいた親しい友達の名前のロールを演じる。会話が切り出しやすいように、二人が会う場所も設定するとよい。例えば、朝学校の門のところで会ったことにし、つぎのような指示を与える。

- ◆「今週の土曜は〇〇さん(当人の名前)のお誕生日です。家でパーティをします。ケーキを食べて、そのあとで、新しいゲームをして遊びたいと思っています。〇〇さん(友達の名前)を誘ってください。朝学校の門のところで会いました」

映画などに誘いあって出かける年齢の子どもには、代用カード21「誘う2」も使える。



### 10 「問い合わせ」

テスターがあらかじめ指定した場所に電話をして、質問をして指示された情報を聞き出すタスクのための対話カード。子どもは質問をするだけで、応答するのはテスターであるため、質問の文型に慣れていれば、かなり子どもに負担の少ないタスクである。しかし、日本語で電話をするということに慣れていない場合は、心理的負担が大きい。

子どもの年齢や生活環境によって、公民プール、動物園、遊園地、図書館など、問い合わせ先を上手に選ぶ必要がある。この場合、途中でテスターの方が詰まって、会話の流れをとめてしまわないように、あらかじめ開館時間や料金など、必要な情報を用意しておく必要がある。

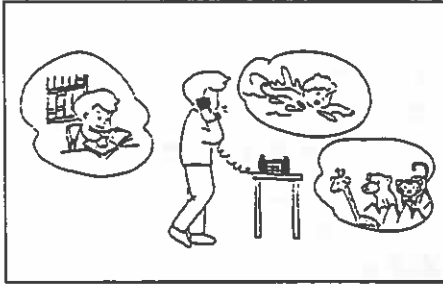
例えば、テスターは次のような指示を与える。

- ◆「〇〇さん(当人の名前)は土曜日に〇〇に行きたいです。でも、(1)土曜日にあいているか、(2)何時からあくか、(3)いくらかかるか、分かりません。電話をして、聞いてください」

三つの質問が覚えられない可能性があるなので、指を立てて3つということを明確にしたり、また採点の折



に、二つだけ質問に答えられればよいとするなど、記憶のテストにならないように留意する必要がある。



### 11 「ねだる」

父親か母親（またはその他の家族のメンバー）にねだることができるかどうかを見る対話カード。やりとりをする力、自分の都合のいい方に会話をリードしていく力を見るタスクである。

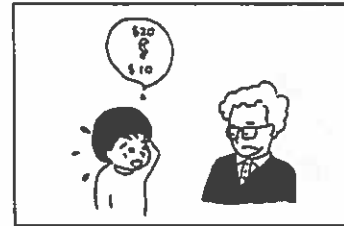
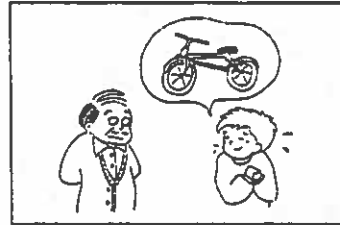
ねだる物は子どもの年齢、男女差、また生活環境によって適当なものを選ぶ必要がある。たとえば、年少児の場合は、新しいゲーム、自転車などが適当であるが、年齢が高くなると、コンピュータ、お小遣いなどがより適したトピックとなる。また「ねだる」対象が父親であるか母親であるかは、それぞれの国の社会通念によって異なる。例えば、北米の場合は父親が介入する率が多いが、日本の場合は母親に「ねだる」ことが多い。

例えば、22「ねだる2」のお小遣いなどの場合は、次のような質問をする。

- ◆ 「どうしてお小遣いをもっと必要なの？」
- ◆ 「何に使うつもり？」

何度かやりとりを繰り返した後、つぎのように会話をしめくくるとよい。

- ◆ 「考えておきましょう」
- ◆ 「じゃ、お父さん（またはお母さん）に相談してみましょう」



### 12 「伝言」

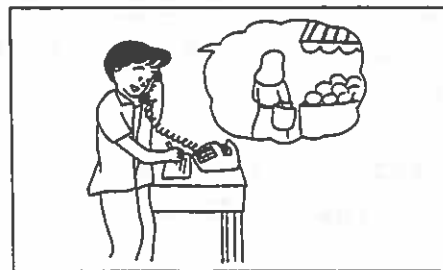
見知らぬ人からかかった電話で、まず(1)伝言を受け、その伝言を(2)親に伝えるというタスクがこなせるかどうかを見る対話カード。(1)は電話に出て答えるだけなので、子どもにとっては難易度の低いタスクであるが、(2)は得られた情報をまとめて伝えるというタスクで、難易度は高い。

例えば、(1)はつぎのような指示を与える。

- ◆ 「〇〇さん（当人の名前）は家にいます。お母さんはいません。電話がかかってきました。電話に出てください」

次に(2)は、場面を変えて、テスターが母親になり、次のように言う。

- ◆ 「ただいま、電話あった？」



年長児の場合、見知らぬ大人への電話の受け答えでは、たとえば、「お母さん、いらっしゃいま

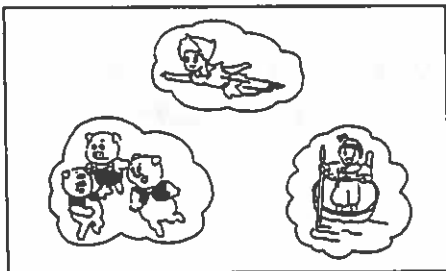
すか」と言うような電話特有の丁寧表現がまざることが多いが、これが理解できるかどうかを見ることも一つのポイントである。また年齢とともに電話を受ける時、「どちらさまですか」と言うような丁寧な定型表現がだんだん使えるようになるが、そのような丁寧差に関する感覚がどのくらいあるかという点も見どころの一つとなる。

### 13 「お話し」

知っているストーリーの再生が出来るかどうかを見る認知カード。

- ◆ 「小さい子（ども）が何かお話ししてと頼みました。お話しをしてあげてください」

そして、この絵カードにある「三匹の仔豚」や「ピーターパン」「一寸法師」の中から選んでもよいし、また他のお話でもよい。お話しが思い浮かばない場合は、教科書に出ていた話でも、授業で習った話しでもよいと指示を与える。



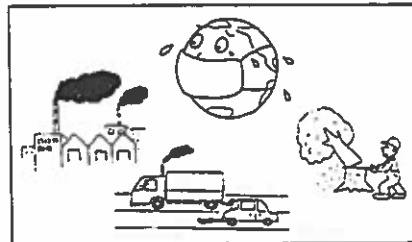
### 14 「公害」

地球がどうして泣いているかの説明、「公害（環境問題）」対策についての意見が言えるかどうかを見る認知カード。例えば、つぎのような指示を与える。

- ◆ 「地球は どうして泣いていると思いますか」
- ◆ 「どうすればいいと思いますか」

年少児の場合は代用カードの30「リサイクル」を使用するとよい。例えば、つぎのような発話・質問をする。

- ◆ 「これはリサイクルです」
- ◆ 「学校でもリサイクルをしていますか」
- ◆ 「〇〇さんの家ではどうですか」



### 15 「地震」

日本人にとって身近かな地震の問題について三つの違った角度から質問をする認知カード。(1)は子ども自身の地震体験、(2)は地震が起こったらどう対処するか、(3)は地震がどうして起こるかである。

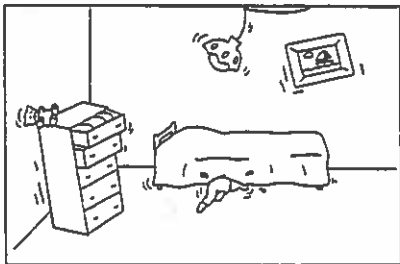
例えば、(1)と(2)は次のようである。

- ◆ 「地震にあったことがありますか」
- ◆ 「その時のことを話してください」
- ◆ 「地震の時はどうしますか」

もちろん地震体験のない子どもには(1)(2)の質問は不適當で、次の(3)のみになる。

(3)は次のような指示を与え、学年相応の理科の教科書用語（地殻・変動など）を使ってどのくらい説明できるかを見る。

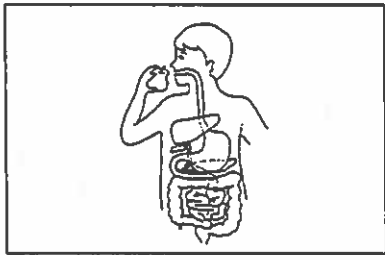
◆「地震はどうして起こりますか」



16 「食物摂取」

年齢相応の教科書用語を駆使して消化機能の説明ができるかどうかを見る認知カード。<sup>4)</sup>例えば、つぎのような質問をする。

◆「りんごを食べていますね。食べたりんごはどうなりますか」



4. 代用カードの使い方

17 「許可2」

6「許可」の代用カードである。43 ページ参照。

18 「やりもらい」

「お誕生日、おめでとう」というような定型表現を見る代用カードである。例えば、テスターは次のような指示を与える。

◆「この女の子は何と言いますか」

話しを発展させて、子どものおじいさん、おばあさんの話し、誕生日にどんな贈り物を上げたか、もらったか、どうしてその贈り物を選んだかなどに発展させると、「やりもらい」に関する文型（基礎面）、対話面・認知面の力を見るカードとしても使える。

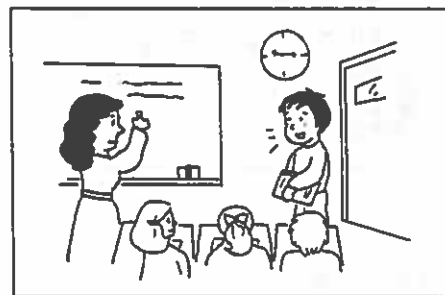


19 「授業に遅れる」

「(遅くなって) ごめんなさい」または、「(遅刻して) どうもすみません」など謝りの定型表現を見るカードである。例えば、テスターは次のような指示を与える。

◆「この子はクラスに遅れました。何と言いますか」

話しを発展させて、遅刻した経験、遅刻した理由の説明などについて話すように仕向けると、対話・認知カードとしても使える。



20 「スポーツ2」

2「スポーツ」の代用カード。42 ページ参照。

21 「誘う2」

9「誘う」の代用カード44 ページ参照。

22 「ねだる2」

11 「ねだる」の代用カードである。45 ページ参照。

23 「情報を得る」

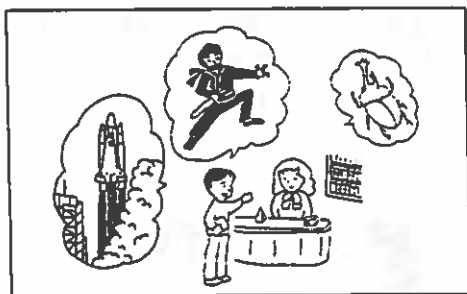
多目的に使える代用カードである。まず図書館（または図書室）の係りの人に質問をして、情報を得るという対話タスクとして使えるし、またロケット、忍者、かぶと虫など、興味のあるトピックについての話しに発展させれば、認知面の会話力を調べることもできる。

対話タスクの場合は、次のような指示を与える。

- ◆ 「今図書館にいます。〇〇のことを調べたいので、どんな本を読めばいいか聞いてください」

認知面の場合は、次のような指示を与える。

- ◆ 「どんなことを調べたいですか」



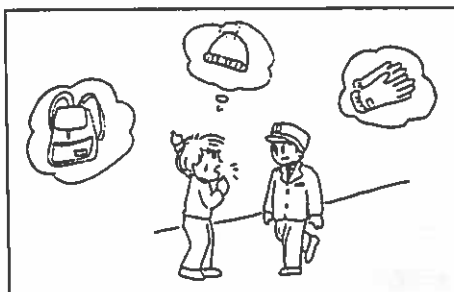
24 「助けを求める」

地下鉄とか駅など公共の場所で物をなくしたという状況で、日本語で駅員、お巡りさんに助けを求め、どのように苦境を乗り越えることができるかを見る代用カードである。例えば、テスターは次のような指示を与える。

- ◆ 「大変です。〇〇がありません。男の人に聞いてみましょう」

まずなくしたという状況をはっきりさせるために、つぎのような質問をしてもよい。

- ◆ 「この子は困っていますね。どうしましたか」

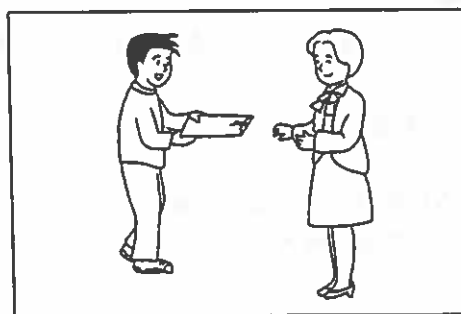


25 「廊下で教師に会う」

この代用カードは学校の授業で日本語を学んでいるJFLの生徒のように、教師との関係でしか日本語を使った経験のない子どもたちのためのカードである。教師になるテスターの方から、「おはようございます」と言って、積極的に呼びかけをする必要がある。

状況としてはいろいろなシナリオが考えられるが、例えば、親から預かってきた書類を廊下で会った教師に渡すという状況にするとすれば、テスターは次のような指示をする。

- ◆ 「朝、学校で先生に会いました。封筒を渡してください」



### 26 「教師に電話をする」

25のカードと同じく、教師との関係でしか日本語を使う環境がない子どもたちのための代用カードである。教師に電話し、授業に関する質問をするという状況である。担任教師の名前をあらかじめ導入会話で聞いておき、テスターが担任教師になって電話の受け答えをする。

話の内容は、宿題やテストの確認、親からの伝言、欠席する理由などいろいろ考えられるが、宿題の確認の場合は、次のような指示を与える。

- ◆「今日学校を休みました。宿題が分かりません。先生に電話して、聞いてください」



### 27 「新生入生にインタビュー」

生徒同士の対話の力を見る代用カードである。例えば、テスターは次のような指示を与える。テスターが新生入生になるので、あらかじめ聞かれる質問の答えを用意し、会話の流れを止めないようにした方がよい。

- ◆「この生徒（子ども）は新しい生徒です。何歳か、お誕生日はいつか、どこから来たかなど聞いてください」



### 28 「自己紹介」

27のカードと同じ内容であるが、一人でまとめて自己紹介をするので、認知タスクとして使用できる年長児用の代用カードである。テスターは次のような指示を与える。

- ◆「あなたは新生入生です。自己紹介をしてください」



### 29 「あやまる」

多目的に使える代用カードである。つぎのような質問をすれば、形容詞の肯定形、否定形の理解度、使用可能度を見る基礎カードとしても使える。

- ◆「困っていますね。この子はどうしましたか」

また男の子を指差して、次のような質問をすると、「あやまる」という機能の表現を調べるカードとなる。

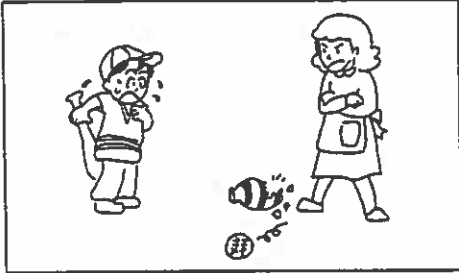
- ◆「今何とっていますか」

テスターが女性になり、次のような指示を与えれば対話カードとなる。

- ◆「〇〇さん（子どもの名前）はこの子です。私はこの女の人です。話してください」

さらにつぎのような質問をして、理由を想像して説明するというタスクにすると、認知カードとして使用できる。

- ◆ 「この子は今どうして困っていますか」
- ◆ 「この女の人はどうして怒っていますか」



30 「リサイクル」

14 「公害」の代用カード。46 ページ参照。

31 「自転車に乗る時の注意」

認知面を調べるための代用カードである。自転車に乗る時の注意事項はそれぞれの地域社会によって異なるが、小学校低学年から子どもが守らなければならないルールの一つと言えよう。例えば、テストターは次のような指示を与える。

- ◆ 「自転車に乗る時には、ルール（気を付けなければならないこと）がありますね。ルールを三つ言ってください」
- ◆ 「〇〇（ルールの一つ）はどうして必要ですか」



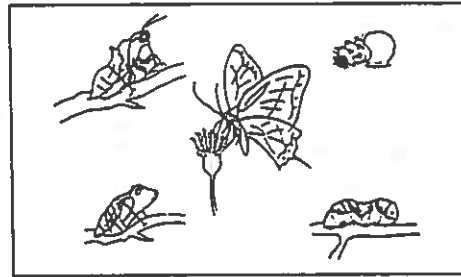
32 「蝶の一生」

理科の教材と密着した認知面を調べる代用カー

ドの一例である。例えば、テストターは次のような指示を与える。

- ◆ 「これは何ですか。そう蝶ですね。蝶の一生について話してください」

卵、幼虫、さなぎ、成虫という語彙や、卵から幼虫がかえる、孵化する、蝶がさなぎから出るなどの表現を使って説明できるかどうかを見るカードである。



この他、理科と密着した認知カードとしては、子どもの学年に応じて次のようなトピックが考えられる。

- 「ひまわりの一生」（1、2 年生用）
- 「とんぼの一生」（2、3 年生用）
- 「火山」（4 年生以上）

5. 絵カードの作成に当たって

カナダ日本語教育振興会では、これまで年少者部会のメンバーその他の会員の協力を得て、多くの絵カードを作成してきた。ここに紹介したのは、そのほんの一部である。すべて会員による手作りであり、イラストも一会員の手書きの絵をスキャンしたものである。教師が何気なく書き添えるイラストという感覚で、子どもが親しめる絵をねらった。専門家が描いた絵ではないため、詳細に関しては問題もあろうが、逆に教師の暖かみの伝わって来る普段着のままの絵である。

絵カードの形式も、現在の形に落ち着くまでにいろいろの試みがなされた。開発当初には、文字を加えた絵カードも使用してみたことがある。例えば、2「スポーツ」は、次のような指示が英文で加えられていた。

◆*"Which sport are they playing? Which sport can you play? Which sport do you like best?"*

もともとOBCは9歳から15歳の子どもを対象にまず開発され、だんだんに9歳以下の子どもにも使えるように改良してきたものである。そのため、絵と文字を両方使うカードが開発当初は可能だったのである。しかし、実際に使ってみると、読みにかかる時間に大変な年齢差、個人差があること、また子どもは文字よりもまず絵そのものに反応することなどが観察された。また、実際問題として、各言語別に絵カードセットを作るのは不合理であるし、理論的にも二つの言語の分化を見るバイリンガル・テストでありながら、テスト上で2言語を両用するという矛盾も問題になった。確かに文字使用はテストの力を借りずに、一様に共通のタスクを課することができるという点で有利ではあるが、バイリンガル児の場合は、同時に失うものも多いということで、絵のみのカードに踏み切ったのである。

これまでのフィールドテストを振り返ってみると、実際に使いやすかったカードと、予想に反して意外に使いにくかったカードとがある。実際にどういうカードが使いやすいかという点について、これまでのフィールドテストの経験を踏まえてまとめてみると、次の5点にしばることができる。

1 まず高望みをしないこと。ある程度の予想が可能な場合は、予想レベルよりも一回り低いレベルのカードを用意する方がよい。易しいカードは

テストの裁量によって発展させ、難しくすることがいくらでもできるが、いったん難し過ぎるという印象を子どもに与えてしまうと、子どもを黙らせてしまう。

2 できる限り、子どもがそのことばで経験したことがある場面、遭遇した状況、あるいは遭遇しそうな状況を選ぶこと。成人、大学生対象の場合は慣れ親しんでいる状況や得意とするトピックを意図的に避けて、慣れない場面やトピックへの応用能力、適応能力を見るということが可能である。しかし、子どもの場合は、会話力が場面と密着した形で伸びていくため、子どもが経験したことのない場面やトピックではまず使用不可能と思うべきである。例えば、電話をかけたことのない子どもに、電話のタスクを課しても出来るはずはないのである。

3 絵カードの意図がはっきりしていて、テストの説明に頼らずにすぐに理解できるもの。欲張っているいろいろな情報を一つの絵に詰め込むと、焦点がぼけて、テストの予期しない方向に行くおそれがある。つまり、時間の浪費につながる。

4 テスターの問いかけをコントロールしやすく、子どもの答えが比較しやすいこと。特にロールプレイの場合は、テストが一つのロールをこなすので、テストにとって相手がしやすい場面や状況であることも大切である。テストがとちって、会話の流れをとめてしまったのでは、会話テストにならない。

5 年齢差や男女差に左右されずに、なるべく広く、いろいろな文化圏の子どもに使えるもの。

以上の条件の中で一番難しい問題は、絵の解釈が見る人の文化的背景によって異なることである。語彙のレベルでも、文化によって答えが変わって

くる。簡単なことばである「家」にしても、それを絵とする時には、文化的特徴がどうしても現れ、なかなか万国共通、だれが見ても「家」と答えてもらえる絵は描けないものである。また、これは実例であるが、「和式トイレ」の絵を見てカナダの子どもが「お風呂」と答えた。確かに和式トイレは絵にすると、洋式のお風呂に見えるのである。

対話タスクのロールプレイに使用した絵も、多くの教師たち、テスターの助けを借りて、誤解のないように、なるべく多くの文化的背景の人に使えるように改善を重ねてきたものである。その過程でいろいろな問題に遭遇した。たとえば、「誕生日パーティーに誘う」というカードにしても、どこの国の子どもも誕生日を祝うと思いがちであるが、実際はそうとは限らないし、またその祝い方は国によって違うものである。また開発初期の絵カードの一つに、歩道で男性に「今何時ですか」と時間を聞くタスクがあったが、これをカナダ在住の子どもに使用したときに、「道で知らない人に話しかけてはいけないし、話しかけられても答えてはいけない」という答えが返ってきた。たしかにカナダでは見知らぬ人とは話してはいけないと厳しく教えられて育つのである。

絵カードがどうしても必要なのは、基礎タスクと対話タスクで、認知タスクとなると絵カードに頼らずにテストをすることが可能である。しかし、限られた短い時間で話す力を調べようとするときには、絵カードが威力を発揮する。絵を変えることにより、子どもの気持ちを一転させ、新しいトピックに引き込むことが出来るからである。これを絵カードなしに、自然な対話を通してやろうとすると大変な時間がかかるものである。

教科内容と関係のある認知カードは、教師自作のカードの方が望ましい。特に教科と密着した会話力を知りたいときには、上に示した16「食物

摂取」や32「蝶の一生」のように、使用している理科や社会科の教科書の一部を絵カードにして、使用するとよい。この場合、在籍学年のものよりは、一年または二年前の既習事項をテーマとする方が無難である。



- <sup>1)</sup> これまで振興会では、1991年に30枚、1992年に80枚のロールプレイカードを作成、その中から50枚を精選して小冊子 Oral Proficiency Interview Test for Heria Langue Students:50 Role-Play Cards (1994)にまとめた。
- <sup>2)</sup> 参考にした語意リストはつぎの3点である。『ひろこさんのたのしいにほんご』（根本牧 他 1986、1995）、『児童日本語教育学の構築に向けて（2）—児童日本語シラバス開発—』（綾部義憲 1994）、TOAM（14ページ、注4）の語彙聴解・口頭テスト。主にカナダで育つ JHL と JFL の子どもたちにとって親しみ度が高く、かつ、絵から得られる情報に曖昧さの少ないものを選び、フィールドテストを通して選精してきたものである。
- <sup>3)</sup> 本書の基礎タスクは日本語の文型を中心に作成されている。それぞれの言語で基礎タスクの焦点は異なり、たとえば、英語の場合には、名詞の複数形、動詞の活用、疑問文の作り方など、日本語とは全く異なる文法事項がテストのポイントとなる。このような場合は、基礎カードの使用目的を変えるか、あるいは新しい基礎カードを作成する必要があるだろう。
- <sup>4)</sup> JSL用に石井恵理子氏（国立国語研究所日本語教育センター日本語教育推進企画研究官）発案のもの。